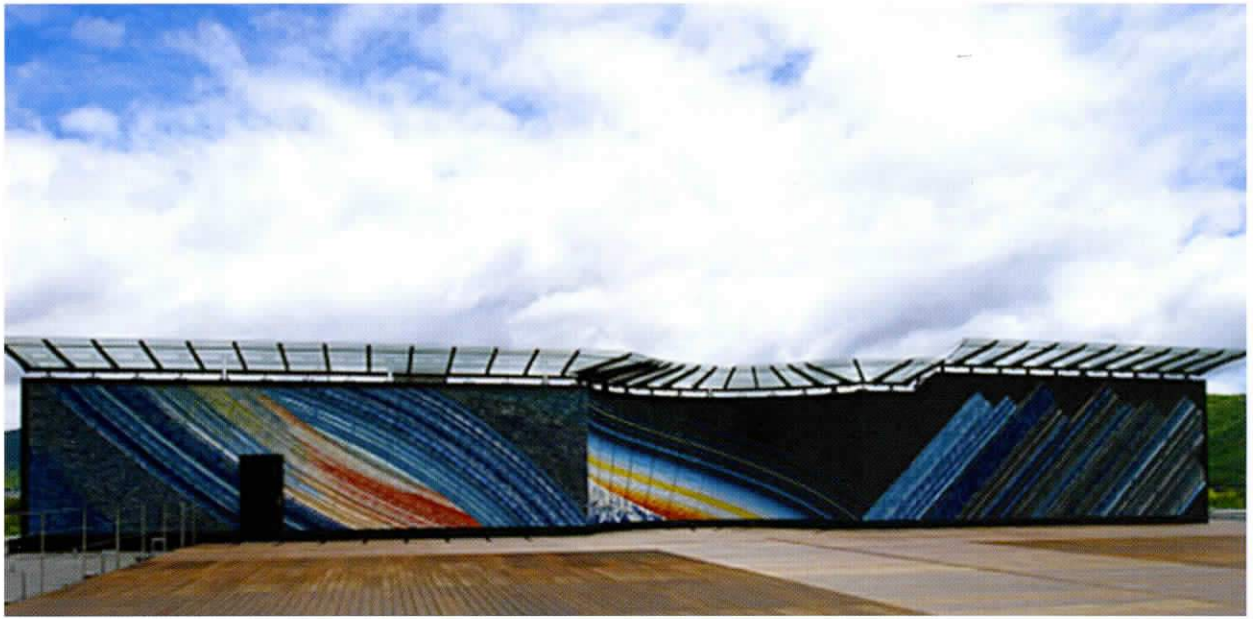


會田雄亮 「宇宙に立つ」 2011年



2014年 7月 会報68号
一般社団法人
日本建築美術工芸協会



「宇宙に立つ」

2011年作 全長36m 設置場所 Funuc本館 7階屋上

會田雄亮

陶芸家・環境造形作家
 東北芸術工科大学名誉教授
 日本建築美術工芸協会会員
 同協会 元理事
 AACA賞 元選考委員

CONTENTS

平成26年度 通常総会 協会HPについて		3
特別講演 「虎ノ門ヒルズ」	弓削昌義	4~6
寄稿 「創造は既存の枠組みの打破から」	本 耕一	7
創立25周年によせて 「芦原義信のこと」	芦原初子	8
「東京芸術劇場 改修」	近田玲子	9
「25周年記念作品展に出展して」	浦波寛弥	10
時代の華一輪 「Power of Art」	小野寺優元	11
第183回 aacaフォーラム 「美味しい美術館の美味しいところ」	飯田郷介	12
第51回aaca講演会 「ジェームス邸と周辺風景のサスティナブルな存続」	松隈 章	13
加藤貞雄名誉会員・前副会長を偲んで	澄川喜一	14
日高單也副会長・理事を偲んで	坂上直哉	15

平成26年度通常総会は 6月12日(木)午後5時45分より建築会館大ホールにて、総会員数314名(個人会員248名・法人会員66名、定足数210名)の内256名(出席者54名、議決権行使書・委任状提出202名)の出席を得て開催された。定款15条の定めにより会長岡本 賢が議長に選任され、又同18条により出席理事全員が議事録署名人に指名され総会が開始された。

冒頭 岡本会長より所信表明があった。

社団法人日本建築美術工芸協会は、昨年11月1日付けにて内閣府により一般社団法人として移行認可されたことにより、社団法人は10月末日にて決算し、その内容については12月12日開催の臨時総会にて会員の皆様にご承認頂きました。本日の総会では一般社団法人としての11月より3月までの決算総会とさせて頂き、その内容についてご審議頂きます。新法人への移行に伴い機構を若干改定し、それがほぼ軌道に乗り各委員会活動も活性化し、協会の活動も大変盛んになって参りました。そのさなか協会活動に活躍されていた日高理事が急逝され、また加藤前副会長もお亡くなりになり大変残念なことになってしまいました。



岡本 賢 会長

お二人のご冥福をお祈りしたいと思います。今年度もいろいろな企画が活発に開催されており、近々では7月3日「新しい都市景観へ」ということで、スーパーゼネコンの設計本部長の方たちに集まっていただいて、これから始まる大変な都市の改造、未来についていろいろな角度からお話しいただける、画期的な会が開催されるのではないかと考えています。ぜひ多くの方にご参集いただければというようにお願いしたいと考えております。いよいよ東京オリンピックのいろいろなプロジェクトも始まることになると思いますので、それらに絡んで東京の都市景観が大幅に変わってくるだろうと思います。オリンピックはスポーツの祭典ですが、同時に芸術文化の祭典という側面もあるのではないかと考えられます。開会式を見ていると壮大な開会式、まさしく芸術文化の祭典であるという感がしています。

そういうオリンピックの機会に、前々から話題になっている「アートの1パーセント」ということを、オリンピック施設の中に取り入れていただけるようなチャンスがあれば、と期待したいところです。いろいろな機会を通じて各委員会の皆さん方の活動や、いろいろなイベント企画を通じてアピールしていければと期待しているところですので、どうぞ皆さま方のご協力もお願いしたいと思います。

続けて議案の審議に入った。

第一号議案・平成25年度事業報告に関する件を岩井専務理事、第二号議案・平成25年度 貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び収支計算書に関する件を石田理事・事務局長より提案説明があり、また村松監事より25年度の会計及び業務について監査報告がなされ、議長採決の結果第一号・第二号議案は満場一致にて承認された。

第三号議案・一般社団法人の定款変更、第四号議案・長期会費滞納会員の処遇に関する件も石田事務局長の提案どおり議長採決により満場一致にて承認された。以上通常総会の議案審議は終了した。

続いて 会長より逝去された日高理事の後任について、先の理事会にて27年度の通常総会での改選まで空席とする決定がなされた事の報告、事務局長より3月13日開催の25年度第三回理事会にて会長より提案され、理事会にて決定した26年度事業計画・事業予算書について報告があり、最後に宇津野副会長より閉会の挨拶により通常総会は滞りなく終了した。

総会の後、6月10日オープンした「虎ノ門ヒルズ」について、森ビル株式会社設計統括部担当部長 弓削昌義氏より開発経緯、建物概要、アート作品等について映像に合わせた講演を行った。(詳細別紙)

最後に出席者全員で交流会がにぎやかに終わりました。(司会 立石博巳総務部会副部長)

ホームページリニューアルについて (会員の皆様のご意見・ご感想をご投稿ください)

平成26年6月10日より 日本建築美術工芸協会のホームページを一新しました。

25年度より総務委員会に「ホームページ部会」を組織し、内容の検討を重ねて参りました。改良は今後も続きます。

大きな変更点は

- 1、協会の主たる事業である協会賞受賞作品を正面画面にスライドショーとして表示しました。
- 2、記事検索の為、主たる項目をバナー表示とし、夫々をクリックすると詳細記事が開くことができます。
- 3、新しい催し物のニュースの検索を容易にしました。
- 4、協会主催行事への参加申し込みができます。
- 5、会員が容易に活用できる様、会員活動ページを充実し、個人・法人会員の活動スペースの拡大しました。
- 6、会員紹介ページに作品写真が掲載できます。
- 7、会員のHPアドレスへ直接リンクできます。
- 8、法人会員の新製品の紹介ページを開設しました。
- 9、過去の事業報告が検索できます。等々

ホームページをご覧ください。

HPアドレス：<http://www.aacajp.com>



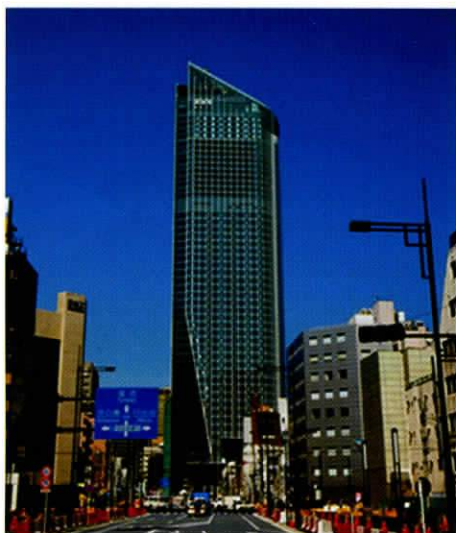
弓削昌義

森ビル株式会社

設計統括部 担当部長

日本建築美術工芸協会法人会員

森ビル株式会社設計統括部の弓削です。よろしくお願いします。虎ノ門ヒルズは昨日からオープンし大変盛況なようです。



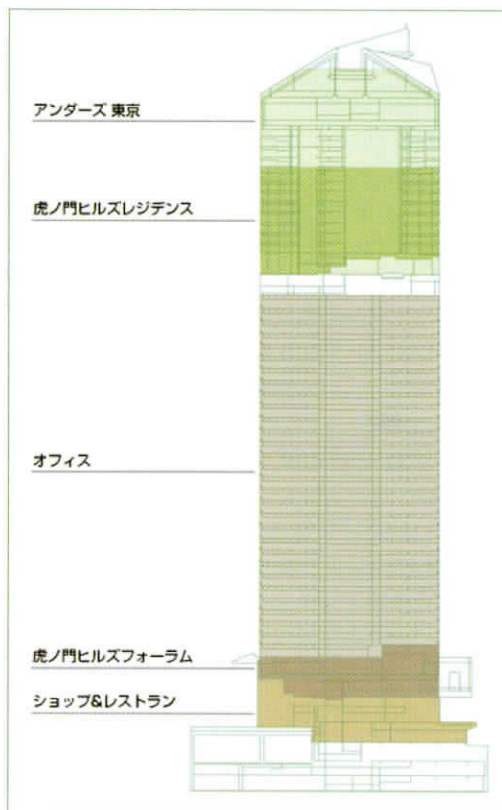
この建物が「虎の門ヒルズ」です。今日は虎ノ門ヒルズについてお話ししますが、建物だけではなく特徴的なものがあります。環状2号線についてのお話。そして建物自身。それと中にいくつかアートを設置していますので、それについてお話をさせていただきます。

事業名称は、環状第二号線新橋・虎ノ門地区第二種市街地再開発事業Ⅲ街区という長い名前です。環状2号線という道路は東京都が行った事業ですが、その環状2号線の真ん中ぐらにあるのが虎ノ門ヒルズです。この開発をするときに従来であれば地権者が立ち退いたあとにできるわけですが、今回は権利を持っている方たちに居続けていただくように3個の街区で権利者を集約しました。今回最後のⅢ街区が虎ノ門ヒルズに当たります。Ⅲ街区ですから、Ⅰ街区、Ⅱ街区は、すでに出来上がっています。環状2号線は外堀通りに繋がって、新橋から豊洲の方までほぼ出来上がる場所です。本来はここで環状2号線の都市計画は終わっていたのですが、もう少し先を延ばして豊洲の方まで行き、オリンピックに向けてもうすぐ完成するということです。

この環状2号線が将来2020年にはオリンピック道路として使われ、東京の玄関口となる道路になるかと思えます。この環状2号線は今年3月に開通しました。

特徴的なのは、この道路は新橋から虎ノ門ヒルズまでは地上部分の道路もありますが、本線は地下を通っています。新橋方面からトンネルでつながってきて、この虎ノ門ヒルズで地上部に顔を出して、あとは地上部分に出るといふ道です。この道路の真ん中にこの虎ノ門ヒルズは建っていて建物の下に道路が走っているという計画です。

虎ノ門ヒルズの建物の概要を説明させていただきます。



52階建ての建物で高さが247m。東京都で2番目に高い建物ですが、最高高さが255.5mで、実は一番高いところの高さで言うと東京で一番高い建物になります。この建物は複合用途です。森ビルの理念として、大きな複雑な用途のものを1棟に集約して高い建物を造り、そのことで下のほうを広く、広場、風致、そして緑にして空間として豊かな空間をつくるという考え方で進んでいます。上のほうから164室のホテルがあります。その下の階に10層の住宅、その下にはオフィス、低層周りに店舗があり、その上にカンファレンスがあります。地下にはトンネルが通っているという形です。建物の本体の設計は日本設計で行いました。

内装については、用途によって何人かのデザイナーを選定し、コラボレーションしています。ホテルについてはtonychi、SIMPLICITYの緒方さん、一部植栽についてはPLACEMEDIAの宮城さんに。住宅の共用部にはホ

テルと同じくtonychi。低層周りではカンファレンスあるいは共用部で乃村工藝A.N.D.の小坂 竜さん。アトリウムのデザインはNAO Taniyama& Associatesさん。それからCasappo& Associatesの植木莞爾さんには、オフィスロビーと共用部についてデザインを。

照明計画では、内原さんが外装の照明、低層周り、外構周りのデザインして頂きました。

用途ごとのご説明をさせていただきます。上のホテルですが、アンダーズという名称です。これはハイアットの一つのブランドで日本では初進出のブランドです。パーソナルというものを題材にして、日本のほかその土地、土地の文化や個性を生かすという形で、ニューヨークあるいは上海にございます。非常にパーソナルなお迎えするというデザインでできています。

中間階にはプールもあります。非常に大きなプロットですが、客室階は当然奥行きがあるのでドーナツ状にぐるりと配して、真ん中は吹き抜けがあります。特徴的なのは、超高層ビルの上部に設けているので、シャトルエレベーターで51階のロビーに上がります。直接ロビーに上がっていただいて、ここに受付があり、レストランや宴会施設があります。そこからローカルエレベーターに乗り換えていただいて下の客室階に下がっていただくというシステムです。51階のロビーの上の52階に屋上テラス階があります。一部チャペルや宴会施設がありますが、ほぼ外部になります。まったくの外部である部分もありますし、一応雨風がしのげる外部もあります。こちらのほうではバーもあります。室内のバー、あるいは外のバーもありますので、お気軽に寄っていただければ、ここで飲んで外を眺めることができるという場所です。

住宅がその下に10層ほどあり、全部で172戸、分譲と賃貸があります。地権者の方が30戸ほどあるので140とすると、その半分70戸ぐらいが賃貸で70戸ぐらいが分譲という形です。ここも高層階の上ですので、ぐるり周りに住戸が配して中はボイドです。

オフィスは30層あります。3バンクで1フロア1000坪。3000平米少しです。30層あります。森ビルでは一般的、通常仕様ですが、それぞれ最先端の仕様、スペックです。基準階で2.8m、0Aフロアで150mm。特殊階では3m、300mmの0Aフロアを持っている。このようなフロア、無柱空間のオフィスがぐるり全周回っている形です。特徴的なのはエレベーターです。森ビルでは、六本木ビルズもそうですが、ダブルデッキエレベーターというものを使っています。超高層で多くの人間を運ぶため、通常のエレベーターはシャフトの中にかごが一つですが、二つの連結したかごを使って倍の人数を運ぶシステムです。二つのかごを伸縮し階高調整することで階高が違って運べるというシステム、「スーパーダブルデッキエレベーター」と呼んでいます。それと4階、5階にカンファレンス。ホール、大ホール、中ホールと

三つのホールを持っているカンファレンスを設けています。

それと3層吹き抜けの商業施設があります。これが先ほど申しました環状2号線のちょうど上部になります。下のほうから上のほうに少し階段状に上がっていく空間です。このアトリウムに商業を張り付けているという形です。約26店舗入っています。すでに昨日からオープンしています。

それと照明計画です。外装もライトアップをしています。環状2号線ということもあって、環というテーマ、それと超高層の頂というテーマで、これは変化をするような動きのあるライトアップをしています。見ていただいたときに少し動きがありますので、頂部の動きとトンネルの換気塔が呼応しているライトアップも楽しんでいただけたらと思います。

これから少しアートについてご紹介したいと思います。この建物の内外にいくつかアートを配しています。超高層の森タワーの外にスプーン状の広場があります。



芝生の広場ですが、ここにジャウメ・ブレンサさんの彫刻を置きます。実はこれだけまだできていません。これは今スペインで作っている最中で、今年11月～12月ぐらいに設置する予定です。

オフィスのエントランスロビーに二つあります。左側の壁面のものがジャン・ワンさんの作品、右側、オフィスのエントランス、セキュリティの中を結ぶところにサン・クワックさんの壁面があります。



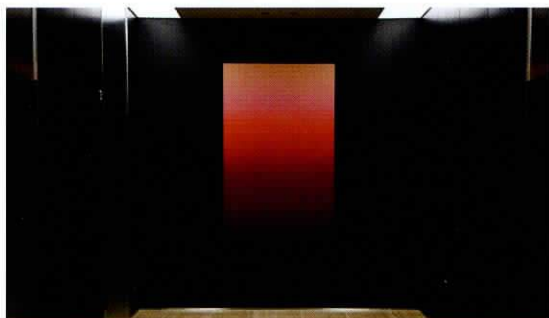
ジャン・ワン

これがジャン・ワンさんの彫刻で、ステンレスで石をかたどっているものです。実際には非常にペラペラのステンレスの板で石ができています。これは実際に制作過程を見せていただきましたが、上のほうから大きな岩を叩き落として、散らばった石をそのまま場所を記憶して、それと同じ石にステンレスを叩きつけて、この形をかたどっているものです。ですからこの辺にきっと落ちたのだと思いますが、そこから散らばっている石が表現されています。そういったステンレスで自然の石の形を作っているというのが特徴の作家です。



サン・クワック

それからエントランスホールとセキュリティの中を分けている壁面に、ガラスの壁面。これは内外から見えるガラスの壁面です。その中にサン・クワックさんのデザインしたアートを彫り込んで色を入れて挟み込んだガラスを3枚設けています。



神谷徹

それとオフィスのエレベーターロビーの突き当たりに、神谷徹さんに作っていただいたキャンバスに描かれたグラデーションのものが展示してあります。

それから1階の車寄せに、内海さんに描いていただいた絵画。長さはトータルで17mぐらいあると思いますが、それを5分割して作品を展示しています。四季を表しています。点描というか、一つのは、はけで500円玉ぐらいのもので押されているような形で、春から冬まで表したものを車寄せに合わせて展示しています。



内海聖史

実は、この虎ノ門ヒルズができていた所は、かつて森ビルの三つのビルがありました。17森ビルという、当時は17階建ての超高層でしたがそれを壊して造っているの、この建物は森ビルにとっては再々開発という事業です。河合紀さんは5年ほど前にお亡くなりになりましたが、この河合紀さんの陶板は、17森ビルができたときに17森ビルのエントランスホールに作っていた陶板を解体する際、そのまま保存し、エレベーターホールに再現させていただいているというものです。それからレジデンスのロビーに安田さんの絵画。それとレジデンスの中には、ほかにも松本陽子さん。これは唯一森ビルが所有していたものですが、それ以外のものは全て今回描いていただいた新作です。こういったものを中に設けています。

それから52階、ホテルの最上階の外部になりますが、そこにジャン＝ミシェル・オトニエルさんのハートマークのオブジェを展示しています。52階はホテルの披露宴を行ったり、チャペルがあるので、この前に立っていただいてハートの前で写真を撮ってもらうのに適当かなということで、急遽、竣工の前日に設置が完了したというものです。一時期、六本木ヒルズでも、このような形のものを展示していたこともありました。

簡単ではございますが、虎ノ門ヒルズの概要説明でした。近くにお寄りの節は、一度実際に立ち寄っていただいて、ご自分の目で見ていただければ幸いです。ありがとうございました。(拍手)





本耕一

森ビル株式会社

取締役 常務執行役員

日本建築美術工芸協会 理事

私が設計事務所から、デベロッパーの設計に移ったのは、ステンレスとガラスを多用した建築が雑誌にあふれ、建築の設計がなんとなくインダストリアルデザイン化？している時であった。デザインとしてはきれいだけれど、だから何なの！？建築にどんどん内向している、そんな建築の矮小化の流れに違和感をおぼえたからである。また、建築を考えることと都市を考えることに境はないはずなのに、敷地から抜け出すことができない。もちろん周辺とのコンテキストは考えるものの、なかなかそれ以上にはいたらない。それは敷地を与えられてスタートする設計事務所では仕方のないことでもあった。

森ビルでは、周辺の土地のオーナーと共同建築を前提に街づくりをしようとする故森稔氏のもとで、自分たちの持っている土地・敷地をはみ出して考えた。本当にどうであった方がいいか、一緒にやればどんなによくなるかを考え、失礼ながら人の家の上にも絵を描いた。港区の200haいや500haにおよぶ絵、そこでは、敷地や道路の概念はない。立体的に街区を考え、デッキをつなぎ敷地境界や道路をまたいで街のあるべき姿（夢？）を検討していく。そのうちいくつかの街区は、現在国家戦略特区のプロジェクトとすべく具体的にプロジェクトが進んでいる。

既成の概念、これを打破しなければ大きな計画はできない。自分の中に持っている、またプロジェクトを進めるにあたって規制となる古い概念・古い分類などを、である。これにどう立ち向かえるかがポイントである。



《トラのもの》

先月、虎ノ門ヒルズがオープンした。環状2号線が都市計画決定されてから68年目の完成である。オフィス・住宅・ホテルが、商業・カンファレンスの上に乗る、さらには道路をまたいで立つ250mのコンパクトコンプレックスシティだ。

立体的に街をつくる森ビルは、事業協力者、特権者としてこのプロジェクトを推進してきた。官民一体となって進められた、オリンピックに向け未来の東京をリードするプロジェクトとして注目を集めている。1989年立体道路制度が創設され、それを活

用することで、道路の上にも建物を建てることのできるようになった。今までは、新しくできる道路用地に住んでいる人は、そこから出ていかなければならなかった。この制度を利用すると、その場所にとどまることが可能である。40年以上凍結されていた計画が古い概念から脱却することで可能になったのである。

その虎ノ門ヒルズプロジェクトには多くのアーティストやデザイナーが参画している。新しいキャラクター「トラのもの」も登場させた。

オフィスエントランスロビーでは、建築家による吹き抜け空間に、インテリアデザイナーによるデザインや家具



虎ノ門ヒルズ

が加えられ、彫刻、ガラス壁に描かれたグラフィックなど、その共演が見られる。オープングレセプションの日、受付カウンターの上にたまたま新しいキャラクターの「トラのもの」がのっていた。どこまでが建築で、どこまでがアート、どこまでがデザインなのだろう、ふと思った。現代美術を見ていると、漫画のキャラクターかと思えばそれはポップアートとして人に感動を与えたり、映像や、パフォーマンス、多種多様な表現があふれている。コンピュータの普及やITの発達により、その表現方法や、発想も変わった。アートの幅も広がり、アートやデザイン、エンターテインメントの境もなくなってきている。絵画、彫刻を中心とした長い歴史が、この短い数十年で爆発的に変わったのである。

AACAも、今までの概念、枠組みを超えた新しい表現をするアーティストや、建築家、新しい世代の仲間がどんどん参加してくれればと思う。新しい発想や、創作をめざす私たちが、既存の枠組みにとらわれないためにも。



ジャン・ワンとサン・クワック



芦原初子

東京造形大学名誉教授



芦原義信氏と初子夫人

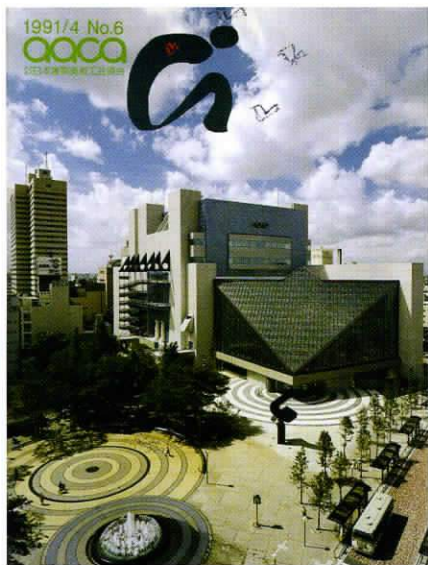
aacaが昨年、創立25周年を迎え一般社団法人として新たな発足となったことは、会員皆様のお力のお陰とお慶び申し上げます。

芦原が亡くなって11年目となりました。存命していれば95才です。最近では、会員の中で生前面識のなかった方々も多くおられることと思いますが、毎年、芦原義信賞を授与していただくので、皆様のご記憶にとどめることが出来ているのではないのでしょうか。

この賞は、創立15周年の折に設けていただきましたが、12月の授与式には体調をくずして、出席できませんでした。その翌年には一時回復して、5月の総会に出席して会長の役目をはたしておりましたが、9月に亡くなりました。

aacaが1988年4月、文化庁所管の社団法人として発足した時には、永年の念願だった建築家、美術家、工芸家が協力できる、これまでに無かった会が出来たと、とても喜んでおりました。どんなに忙しい時でも、aacaの会合には他の用事をこわってでも出席していたようです。

発足当時は、総会や景観シンポジウムの際には、歴代の文化庁長官が度々出席しておられました。会員同士の親睦が仕事の上でも大切だといって、総会後の会合では、おすしの桶をもって会場をまわっていた様子が目に残っています。



「1991年4月 aaca6号表紙 東京芸術劇場」
写真撮影 美輪晃久

芦原が亡くなってすぐに、芦原義信デジタルアーカイブスをつくりましたので、インターネットでご覧いただけます。<http://www.ashihara.jp/>を検索いただければと思います。

aacaの他にも、武蔵野美術大学で卒業生の作品の中から、芦原義信賞を毎年出しております。この大学では、1964年に、校舎の設計と建築学科の創設とに携わることが出来ましたが、此度、文部科学省の予算を得て学内に芦原の部屋を設けて、設計図面、原稿その他、足跡を紹介するものを永久保存していただけることとなりました。

その他、東大のゼミの有志の方々が、「芦原会」をつくって、各大学の大学院一年生の卒業制作課題の中から選んで、「街並みの美学トラベルスカラシップ」を2名に出しております。めざす研究のために訪れたい海外の都市で、まとめた課題を帰国してから発表することになっております。それぞれの賞で、お忙しい方々が貴重な時間をさいて選んで下さっていることは、感謝にたえません。

晩年、芦原は若い人たちが建築家として世に出る助けになることが、何か出来ないかとしきりに言っておりましたが、関係の方々の御力添えのお陰で、その意志をついでいただけることは、大変有難いこととございます。毎年、各授与式の後で、若い方々が自分の作品又は研究について、一生懸命説明していらっしゃるのを拝見しますと、私は感動いたします。きっと芦原も喜んで聞いていることと思います。

25周年記念の会報を拝読しますと、「景観シンポジウム」を通して、協会の方々が豊かな環境と美しい景観をめざして、種々活動していらっしゃる様子を知ることが出来ます。設計のかたわら、1962年に「外部空間の構成」を出版して以来、「街並みの美学」「隠れた秩序」「東京の美学」等々、数々の本を内外で出版して、空間論、景観論を述べておりましたが、aacaの皆様のお仕事の上で、何かの参考となって実際の形として残っていくとすれば、さぞ満足して見守っていることと思います。

aacaの発展と、会員の皆様の益々のご活躍を心より願っております。



近田玲子

照明デザイナー

AACA賞選考委員

東京芸術劇場は、4つのホールと展示室・アトリウムを持つ劇場コンプレックスで、芦原建築設計研究所の設計により1990年に竣工した。

22年後の2012年、松田平田設計と香山建築研究所による改修設計が完成し、リニューアルオープンした。

香山氏は、雑誌新建築で設計に際しての考え方を、「通常の設備維持更新のための改修でなく、劇場の個性を一新し、強化すること。」加えて、「まず、劇場全体が、都市に向かって、ここは特別なんだ、ということ強く訴える表情を持つ必要がある。」と書いている。

照明改修に当たっては、以下の3点を目指した。

- 1、劇場としてのエキサイティングで華やかな雰囲気をつくる。
- 2、アトリウムや各ホールの特徴を強調する。
- 3、省エネルギーを実現する。

改装前は公園の木々の中に埋没して建物全体が暗い



印象だったが、改修後はアトリウムのトラス天井コーナーへのライトアップによって劇場ファサードを際立たせ、劇場の存在を明確にした（画像左上）。

最大の成果は、アトリウムをエキサイティングで華やかな雰囲気にしたことである。アトリウムに足を踏み入れた来訪者はまず、温

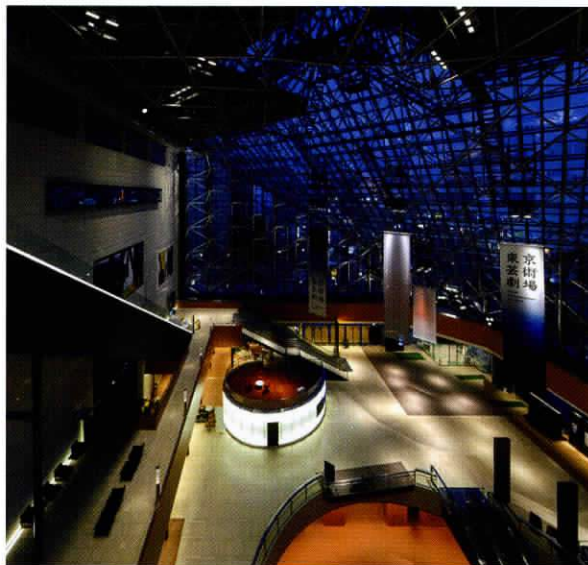
かみのある光の色に包まれて「劇場に来た」という特別な気持ちを持てるようになった。特別なイベントの時には、カラー照明によって高揚感がより一層高まる。



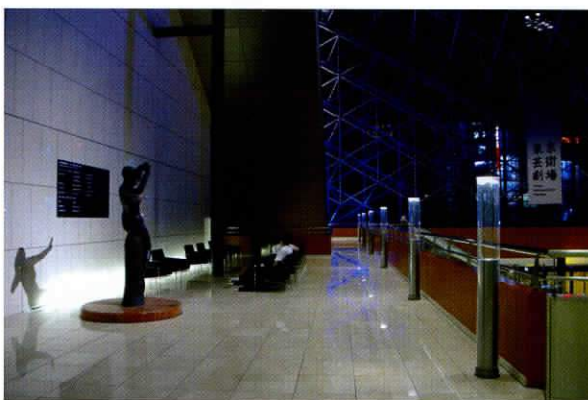
また、28mから18mの高さの天井高に設置されているにも関わらず、アトリウム照明器具のエネルギー消費量を55パーセント減少させることが出来た（画像左下）。改修前の建物には、芸術と建築のコラボレーションをめざして沢山のアート作品が設置されていた。改修に伴って再配置されたアート作品が、より

輝きを増すよう、照明に注意を払った。

アトリウム二階回廊に置かれた彫刻には、28m高の天井のメンテナンス用のキャットウォークからスポットを当て、壁に映る影も楽しんでもらうようにした（画像右上）。



大ホールホワイエのコーブ天井に描かれていた絵は、演色性の高いランプで照射することにより、見違えるようにクッキリと見えるようになった（画像右下）。



まぶしく、壁に多くの不快なグレアがあったメインホールの照明は、効率的で眩しさのないダウンライトに替えた結果、ステージがより印象的になった。

苦勞したのは、東京都から認定された既製の照明器具を使わなければならなかったこと、高齢社会に対応するため、エントランスとエスカレーターの乗り場領域をオフィス並みの高照度500ルクスにすること、加えてLED照明器具はノイズの原因となる可能性があるため、ホールの内部やホールホワイエで使うことが許可されなかったことであった。

この改修プロジェクトにおいて、照明デザイナーが果たした役割は、時代の変化に伴って照明のオリジナル設計が直面した問題点を解決し、建物の価値をより一層高めたことである。



浦波寛弥

戸田建設株式会社

建築設計統轄部

日本建築美術工芸協会法人会員

「遊びの色と形」というテーマを考えたとき、私達が企画運営委員として行った「設計文化祭」が頭に浮かびました。

戸田建設建築設計統轄部では、2007年に東京都庭園美術館で開催した第1回につづき、第2回設計文化祭を芝浦工業大学で2012年に開催しました。文化祭のテーマは『建築で笑顔』。全設計部員が参加し、人びとに笑顔を与える建築を考えるという趣旨で行われました。会場は「まちを笑顔に」、「しぜんを笑顔に」、「ひとを笑顔に」、「ときを笑顔に」の4つのエリアで構成され、それぞれのテーマに沿ってプロジェクトを紹介。そして「笑顔をつくるまち」として、全員が同じフォーマットで作成した家型を会場に展示しました。この家型は、建築設計統轄部に所属の事務職や技術職、役員など、部内一丸となって作成し、さまざまな色や形のアイデアが会場に広がりました。会場には学生や、建築関係者に留まらず、通り掛かりの家族連れなど予想以上に多彩な顔ぶれで、多くの方に笑顔を届けることが出来ました。



文化祭に展示された様々な色や形の家型



会場に訪れた多くの子供達



標本に詰め込まれたイエガタ

このように部員全員が作成した「イエガタ」こそが、それぞれの心の中に持つ遊び心を、色と形で表現していると考え、それを別の形で発信することで戸田建設建築設計統轄部としての「遊びの色と形」を表現しようと試みました。

本作品では色とりどりの「イエガタ」を標本のように木枠の中に「彩集」。それぞれの「イエガタ」は5cm×5cmのグリッドに収められ、背景を深い黒とすることで、色と形を立体的に浮かび上がらせています。まずは、この多彩な色や形をじっくり堪能してもらいたい。そして、目線の高さに設置された白いニュートラルな「イエガタ」と向き合うことで、来場者の方にも自分なりの表現を想像してもらいたいというコンセプトで作成しています。この展覧会で創作意欲を刺激され自分のアトリエに戻って新たな作品を考える。そんなシーンをイメージしながら本作品を製作しました。



白いイエガタに記載された来場者へのメッセージ



小野寺優元

彫刻家

日本建築美術工芸協会個人会員

調査研究部会部員

ここまでの彫刻家小野寺優元の活動の中に、「まちづくり」をアートの視点から考える流れがあります。2008年国交省地域観光振興事業「小江戸川越観光ルネッサンス事業」の一環として[あるってアート2008]をアートディレクションいたしました。アートが起爆剤となり川越のまちの魅力が再認識され、市民にもてなしの心が根付くことを目指した事業です。その後も小江戸川越の文化を顕在化させるアートイベントは継続しており、この事業を通じて、まちづくりにアートが不可欠なことを認識してもらうことができました。

私がまちづくりに関わるようになったのは、1987年埼玉県東武東上線ふじみ野駅を新設する土地区画整理事業のまちづくり委員を引き受けたのが最初です。ここでは、2005年までの18年間全国主要都市の区画整理の現場を数多く視察し、まちづくりにおける技術面の詳細を学ぶとともに、芸術的な理念についても実際に即して検討することができました。アートの視点を導入し景観に留意したこの街は、東上線沿線で最も住みたい街との評価を得、景気が停滞し各地の地価が下落する中、地価は維持され地権者から感謝されました。

一方同じ時期、広島西部丘陵都市(現広島Acity)の開発にも携わるようになりました。このまちづくりは、広島でアジア大会が開催されるのを機に、広島の文化をアジアに向けて発信し、環境にも留意した良質な街を創ろうというプロジェクトでした。

御影石の山ひとつを削り平場をつくり、そこに街を造ります。掘り出された多数の御影石は場内で破碎され谷に埋められますが、中には石材としても質の良い巨石があり、それらの有効活用のため石の彫刻家として私が起用されたのです。このプロジェクトは発足当初より新宿の本社会議室で行われる作戦会議に彫刻家が出席し、アートの視点から提案するという、当時としては画期的なものでした。現場では日本の大手ゼネコン各社がそれぞれ工区を構え、私はその責任者に指示を出すという緊張感漲るプロジェクトでした。人間が山を削り自然を損ねたことへの罪ほろぼしの意味を込め、山の神をイメージした100トン超の磐座(イワクラ)を始め、十数基のアーバン・コーナーストンを制作し据え付けました。またこの街の都市軸は安芸の宮島・厳島神社と結ばれ、この街が未来永劫海と山のエネルギー循環に包含されることを意図しています。

現在私は川口市立アートギャラリー・アトリアの芸術監督として企画全体を見ています。川口市は人口58万人、かつて鋳物業を中心とした金属加工業で栄えた工業都市から東京に近隣した高層マンションが立ち並ぶ大都市として姿を変えつつあります。アトリアは収蔵品を持たない、市民参加・体感型の企画展、ワークショップ、講座等を行うアートの視点でまちづくりを考えるアート拠点なのです。アトリアは、伝統的な美意識を踏まえつつ、新しい価値を見出そうとする表現に目を向けます。同時にものづくりの人材や技術の発掘再発見に努め、ものづくりに携わる若い人が移り入ってくる契機となるような事業を企画しています。

これとは別に、私は10年前より埼玉県比企丘陵を舞台に、「サイトスペシフィックアートと地域創造」をテーマに掲げた[国際野外の表現展]を推進しています。このアートイベントは、世界各地で活躍するアーティスト達の「アート力」を活用して地域に潜在している固有の魅力を顕かにすることを目指しています。サイトスペシフィックアートとは、オブセッションな概念と「場」の特異性が渾然一体となったアート作品のことを言います。

国際野外の表現展の試みは、作品に「場」の記憶を組み込む試みであり、ホワイトキューブでは得られない感動を喚起しようとするプロジェクトです。

私は昨年よりaacaの調査研究委員会の末席に加わり、評価・政策システム分科会において、アートの社会的評価軸の構築に資する研究に参画しています。その中間報告が序文で述べているように、直面する東日本大震災からの復興には「アートのちから」が不可欠であり、アートが復興支援の一助になることを願っております。



《よつめらいぎよ》



飯田 郷介

建築家

中札内美術村副館長
日本建築美術工芸協会個人会員

「美味しい美術館の美味しいところ

——建築の保存を考える」

「美味しい美術館」についての講演ご依頼をいただきましたが、協会の皆様には「美味しい美術館」を読んでいただいた方が大勢いらっしゃると思いますので、今回は未発表の原稿の中から「三菱一号館美術館」を選びました。また「三菱一号館美術館」は再生した建物です。そこで「建築の保存」をサブテーマに組み立てました。

「北海道の自然を保存・再生させたミュージアム」

まずは、私が企画・設計・プロデュースを長年手がけてきました美術館を紹介しました。1992年に開館しました「中札内美術村」は当初工場建設用地として広大な柏林を購入し、美術館づくりからスタートしましたが、柏の木を切つてまで工場は造らないと、柏林は保存されました。そして新たに工場用地として購入した草木の生えていなかった荒地を10年の歳月をかけて自然を再生し、山野草の中に建築100年以上のクロアチアの民家を移築した「坂本直行記念館」などの美術館群が点在する「六花の森」が誕生しました。

「岩崎彌之助がつくった丸の内オフィス街」

三菱一号館美術館を書こうと思ったのは、120年前の建築を当時のままに復元させた大偉業と丸の内オフィス街をつくった岩崎彌之助をもっと多くの方々に知っていただきたいからです。三菱を創業した岩崎彌太郎は、歴史の表舞台で活躍しましたが、弟の彌之助は、現在の三菱グループを創り育てた二代目の社長です。皇居を守るために丸の内周辺に配置されていた陸軍の用地が売却されることになり、彌之助は丸の内・有楽町地区、三崎町地区あわせて10万7千坪の全地を当時の東京市の予算の三倍と言われる金額で、しかも三菱一社で購入し、世間だけではなく、三菱社内も驚かせました。そして早速丸の内地区の街づくりに着手しました。ロンドンの街並みを目指した彌之助は、土地を切り売りはせず、三菱が設計した貸事務所により一丁ロンドンと言われた赤レンガづくりの美しい街並みをつくりあげました。



三菱一号館美術館

「日本近代建築の父と謳われたコンドル」

丸の内に最初に建てられた三菱一号館は英国ヴィクトリア時代のアン女王様式と言われ、簡素な赤レンガで軽快・繊細なデザインとなっています。この建物を設計したジョサイヤ・コンドル（1852～1920）は、ロンドンで建築を学び、明治政府の要請に応じ、1877年来日、25歳の若さで工部大学造家学科主任教授となりましたが、ロマン主義的様式の典型であるゴシック様式を日本にもたらし、在任中初めて西欧の建築教育体制を日本に移植し、多くの建築家を養成し、現代日本建築界の基礎を築きました。コンドルの作品の中から、コンドルが薔薇庭園設計も手がけた古河虎之助邸（北区西ヶ原）、コンドル晩年の代表作三井倶楽部（港区三田）、岩崎久彌邸（文京区湯島）、岩崎彌之助高輪別邸（現・開東閣、港区高輪）などをご紹介します。

三菱一号館は明治27年（1894）に完成しましたが、その建設中の明治25年に丸の内に美術館の計画があったのも驚きです。「文化の街づくり」の中心施設としてコンドル設計の設計図は残っていますが、残念ながら実現しませんでした。しかしこの企業メセナの想いが今回の美術館づくりにつながったと思います。

「味どころ“オリエント・カフェ”」

「美味しい美術館」は、「見どころ」、「魅どころ」、「味どころ」、「散策のヒント」の4部で構成されていますが「味どころ」は、丸の内から少し離れるのですが「オリエント・カフェ」（文京区本駒込）を紹介しました。このレストランは東洋文庫に併設されています。東洋文庫は三菱第三代当主岩崎久彌が1924年に設立した“世界屈指の東洋学専門図書館”と言われ、柱となる所蔵は「モリソン」文庫です。ロンドンタイムス社北京駐在の特派員であったウィリアム・モリソンが20年にわたり心血を注いで蒐集した極東に関する欧米文献約2万4千冊を久彌が現在の貨幣価値約70億円で購入したことに始まります。またモリソンは「日露戦争を演出した男」として知られ、中国に進出してきたロシアからイギリスの利権を守るため6年以上にわたる活動により日本は戦争に突入したという歴史も秘められています。オリエント・カフェのお契めは文庫ランチ「マリーアントワネット」で1日10食限定のランチは開店とほぼ同時に売り切れとなります。「散策の



ヒント」では、コンドルが設計した岩崎彌之助邸がある静嘉堂文庫美術館（世田谷区岡本）を紹介しました。

最後に本講演にあたり、写真・資料をご提供いただいた三菱一号館美術館の皆様にご感謝申し上げます。



松隈章

建築家

(株)竹中工務店 本社設計本部

日本建築美術工芸協会法人会員

◆歴史的建造物「旧ジェームス邸」存続の危機

神戸市垂水区塩屋町の通称ジェームス山と呼ばれる地域、その最南端の瀬戸内海を一望する高台に位置する「旧ジェームス邸」は、昭和初期にイギリス人貿易商E. W. ジェームス氏が地域一帯を外国人向けの賃貸住宅地として開発し、1934年（昭和9年）に自邸として建築したスパニッシュスタイルの壮大な邸宅（設計施工 竹中工務店 設計担当・早良俊夫）である。1961年大手電機メーカーの創業者へと引き継がれ、自邸、後に迎賓館として永く維持・活用されてきた。しかし、長引く不況は、大邸宅を大切に遺してきた個人だけではなく企業までも直撃、持ち主である企業の完全子会社化の中で、土地売却による建物の解体の危機に直面する。



◆持続可能な施設への転換

一二つの法的手続きにより新たな価値を付加—

「旧ジェームス邸」の建つ敷地周辺は、第一種低層住居専用地域内にあり、上質な住環境が保たれている一方で住宅用途以外での使用は厳しく制限されている。そのため、一企業が広大な庭園と歴史的建造物を維持・存続させる事業スキーム構築することは極めて難しい。つまり、事業成立できるスキームを構築しない限り、邸宅以外の用途での保存活用がほぼ不可能だった。

そこで、本館（既存建物）には、防災・耐震改修を施したうえで、建築基準法第3条の規定に従って神戸市の文化財に指定することにより建築基準法の適用除外とした。さらに、公聴会および近隣説明会を開いて地域住民の同意を得、建築審査会での決定により、建築基準法第48条ただし書きの規定に従って用途許可の指定を受けた。

この二つの手続きにより、第一種低層住居専用地域にありながら事業・運用上欠かせないチャペルとバンケット棟の新築（増築）が合法的に認められ、ハウスウェディングやレストランとして利活用（集会所）が可能となった。

こうして邸宅全体の事業継続性を確保するための基本条件を具備し、資産価値の向上をはかることができた。

◆地域の景観に溶け込む

既存の本館の設計を担当した早良俊夫は、1930年頃「ジェームス邸」や「雲仙観光ホテル」（1935年・現存）などクラシカルなデザインの作品を遺したが、同時に水平線を強調したモダニズム建築「日東ティーハウス」（1938年・現存せず）なども手掛けている。今回「旧ジェームス邸」に新築した2棟は、あたかも早良俊夫が現代において増築することをイメージして設計した。趣のある歴史的建築である本館に対比して、透明、あるいは地となる材料、形態にして敷地の南西角にチャペル棟、旧プール跡にバンケット棟を配置し、存在感を最小化して邸宅や地域の景観に溶け込ませている。



◆おわりに

建てられた時代の息吹を実物として今に伝える歴史的建造物の存在は、地域の活性化や住民の地元への愛着の醸成にとって、とても大切なものだと認識が近年急速に高まってきている。その背景には、1995年1月17日の阪神淡路大震災、2011年3月11日の東日本大震災などの地震や津波による都市の記憶の喪失体験があり、地域で歴史を刻んできた古い建物が現代的な建物に建て替わっていくなかで、日本全国どこでも同じような街並みになってきていることへの危機感が広がっているからだろう。

従来、主に文化財指定や一個人や一企業による所有・利活用に頼ってきた歴史的建造物の保存・利活用を、今のグローバル時代、経済至上主義の大きな社会の動きの中で継続していくには、事業として持続可能なしくみの構築が不可欠だ。普段なにげなく暮らしている建物やそれをとりまく地域環境は、企業と同じように「経済・社会・環境」と言った「トリプルボトムライン」の上にバランスして成立している。つまり、現代のように社会の変化が激しい時代においては、何もせずに大切な建物や景観がいつまでもそのまま存続しつづけることは極めて難しい。

時の記憶を次世代に繋いでいくために、様々な専門家のネットワークと知恵の結集による実践をひとつひとつ積み上げ新しい価値観や市場を切り開いていく時代を迎えている。



澄川喜一

彫刻家

日本藝術院・新制作協会会員

東京藝術大学元学長

日本建築美術工芸協会名誉会員

「人生の助っ人」

1965(昭和40)年、第1回現代日本彫刻展が開かれた。宇部市常盤公園の広々とした会場での大野外展だった。そこで毎日新聞社のバリバリの学芸部記者であった加藤貞雄さんにはじめてお目にかかった。

屋外に展示された私に貧弱な作品の前で「これから日本の彫刻は野外空間に耐える造形でなくてはならない」と示唆された。今も忘れられない大切なお言葉だった。以来、毎年、毎年の新制作展や個展など加藤さんはいつも会場を訪ねて下さった。

1979(昭和54)年、新制作展に出品した「そのりのあるかたち」が平櫛田中賞を受賞する事になった。

その時「これまで多くの作品を見せてもらったが、仕事の狙いが何となくブレている様で物足りなかったが、やっと方向が見えて来たね」と批評して下さいました。

学芸部記者として早くから若い作家の個展など丁寧に見て廻り、誰がどんな方向に進んでいるか、如何に仕事が発展しているか、温かく見守ってくれるという、作家にとっては唯一頼りになる助っ人だった。

後に学芸部長として広く見識を積み、論説委員を経て目黒区美術館館長や茨城県近代美術館館長など重責につかれた。

その後、日本建築美術工芸協会の副会長も務められた。協会のAACA賞選考委員として地方の受賞候補作品の選考にご一緒した事があった。暑い日の事だったが現地入りし候補作の建築を隈なく調べるため、精力的に歩き廻る加藤さんに驚いた。帰京して調査結果を明解な文で発表される加藤さんに改めて感心した事を思い出す。

時々の思い出は尽きないが、常に本物の良さを求め続けた人だった。同世代のお一人として考えると、かつて若き美術記者だった加藤さんがよちよち歩きの彫刻家(私)に着かず離れず、お互いに刺激し合って永年に亘ってお付き合い下さった、私の人生の有難い助っ人だった。

*新美術新聞 2014年5月1・11日号より転載

©美術年鑑社より転載許可 無断転載禁止



故 加藤貞雄氏



理事会にて



京都 何有荘にて

日高單也氏に捧ぐ

時鳥 今朝鳴く声に 驚けば 君に別れし 時ぞありけり (古今集)



坂上直哉

美術家

日本建築美術工芸協会
情報文化部会長



故 日高單也氏

中でも印象深いのは、明治30年頃岩崎小彌太の別邸として創建し成城に移築されたご自宅で、度々開かせていただいた委員会(飲み会?)。今思うと、各自の仕事が強烈に忙しく華やいでいた盛りの頃。華と華を寄せ合い、ぶつけ合った濃密な時を一緒にさせていただいたことは幸せでした。

本年4月、制作したワークが納まった建物(斎場)が竣工しました。この度のワークは、奇しくも亡くなった方の魂を運ぶ月舟でした。珍しく木彫に挑戦して仕上げた時鳥(ほととぎす)が先導している、手書き彩色を施した月舟。貴兄は「天国は何にもないからツマラナイよ。地獄の方がベンチだとか鋸だとかいろいろあってきっと楽しいよ。」と飲みながら冗談を言っておられました。これまで私のワークの数々を見て下さっていた貴兄です。手塩にかけた時鳥は、きっと天国に貴兄を乗せた舟を先導していることと思います。地上は淋しくなりました。長きにわたり良く付き合っ

て戴きました。

合掌

5月13日、貴兄の突然の訃報に接しました。つい先日病院にお見舞いに伺った折、いくらか辛そうでしたがいつもの口調で「ゴメン寝たままで」と姿勢を正そうとされていた姿が目に見えます。ひと月もしない内に釣瓶落としのような訃報…、後日ご親友から、既に症状が悪化し、肺の痛みに日々眠れず、耐えに耐えていた時期だったと伺いました。私達には日頃のダンディな姿を残して逝かれました。貴兄は日本大学教授時代、生産工学部創世デザイン学科の創立に貢献。また、将来ある学生に奨学金を「給付」(貸与ではなく返済義務が無い)する先進的な一般社団法人モーレイ育英会の理事長を務めるなど、若い世代を育てることに心血を注がれました。同時にaacaの委員会委員長、理事、最後は副会長として、長年協会のために尽力してくださいました。貴兄との出会いもaaca。近江 栄先生が調査研究委員会に貴兄を副委員長として招来されたのがご縁の始まりでした。6才年上の兄貴分として、わがまま放題の弟分にお付き合いいただき25年…走馬灯のごとく思い出されます。

パブリックアート&パブリックスペースをテーマにしたシンポジウム(1994建築家倶楽部)、阪神大震災の文化面被害状況現地調査(1995.2)、大阪フォーラム「地震と環境造形」(1995)、「中国敦煌壁画への旅」(1995)研究レポート「文化・芸術と都市空間」(1999~2002会報誌掲載)京都北山・美山景観シンポジウム(2004)、伊根舟屋景観シンポジウム(2005)、いわみ元気フォーラム(2006)、京都何有荘見学(2008)…昨年は被災地田村市へ地域に伝わる「お人形さま」の衣替えの見学。



写真(上) お人形様の前



写真(上左) 敦煌での夜、自転車のスポークに刺したシシカパブを楽しむ。1995年

写真(上右) 鳴沙山をラクダで旅をする。1995年



写真(上) 日高邸での委員会風景

新入会員

個人会員

中川一人	〒275-8575	習志野市泉町1-2-1	日本大学生産工学部	TEL 047-474-9095	創生デザイン学科
辰巳 優	〒103-0007	中央区日本橋浜町3-7-1		TEL 03-3664-1735	(株)Danto Tile
田中竜太	〒102-0071	千代田区富士見1-11-2		TEL 03-6380-8070	(株)ビベル
吉田佑子	〒171-0041	豊島区千川1-22-8		TEL 03-3955-3800	
吉川盛一	〒111-0053	台東区浅草橋1-19-7	川井ビル 2F	TEL 03-3862-2244	(株)ベクトル
三上紀子	〒113-0021	文京区本駒込4-39-2-1008		TEL 03-3828-5336	レゾナンス・コンサートタイプ 建築士事務所
室伏次郎	〒152-0022	目黒区柿の木坂1-12-13		TEL 03-5731-7244	(株)スタジオ・アルテック

法人会員

エヌ・アンド・エー(株)	〒150-0013	代表取締役 磯崎寛也	担当 同 左
スタッフ・ナイン・ハット(株)	〒104-0061	代表取締役 堀田 誠	担当 城田 誠
西松建設(株)	〒105-8401	代表取締役 近藤晴貞	担当 建築事業本部 常務執行役員 安部修一
(株)レモン画翠	〒101-0062	代表取締役社長 松永直美	担当 社長室
(株)オックスプランニング	〒150-0002	代表取締役 三浦巖嗣	担当 管理本部 杉野尚子
広友リース(株)	〒107-0052	執行役員建設ソリューション営業部 中島一穂	担当 同 左
(株)NTTファシリティーズ	〒108-0023	常務取締役 建築事業本部長 横田昌幸	担当 建築事業本部 事業企画部 桑名義典

会員の移動

岡本 賢	勤務先開設	岡本 賢設計室・1級建築士事務所
長岡正芳	勤務先名称変更	(株)MNAアトリエ
芦原太郎建築設計事務所	法人担当者変更	石岡俊二
旭化成建材(株)	法人担当者変更	遠藤泰弘
菊川工業(株)	法人担当者変更	宇津野和俊
(株)クマヒラ	法人担当者変更	川田 充
コトブキシーティング(株)	法人担当者変更	高山政幸
清水建設(株)	法人担当者変更	深沢公文

東日本大震災 「芸術文化復興預金」 への募金のお願い

2014年6月末現在 92,382 円

協会では、東日本大震災により逸失した文化財及び地域文化の復興のため、協会指定団体へ26年度に寄付を行なう事になり預託先を選定中です。会員の関係先で希望団体が有りましたら事務局迄お知らせください。会員の皆様には活動やチャリティー活動等による売上の一部を募金に協力して戴きますようお願いいたします。

復興預金口座は下記に記載いたしました。

郵貯銀行 港芝五支店 当座預金 口座名： AACA芸術環境復興預金口座
店番： 019 口座番号： 0338383

編集後記

このたび25周年を期して会報の構成を刷新し、表紙には会員の作品を掲載、内容も会員の皆様の活動や、一般の方々からの寄稿文等を中心に編集致しました。会報編集部会は、会員の有志の皆さんで編成され、記事の収集から編集・発送まで協力しながら運営されています。

会員の皆様の作品紹介、活動報告、展覧会、個展・出品展等のご案内、企業の広告等を会報に掲載いたします。詳しくは会報編集部会に、ご相談ください。

発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
発行人 会長 岡本 賢
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20 建築会館6階
Tel 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
Url http://www.aacajp.com
E-mail info@aacajp.com

編集 総務委員会 会報編集部会
野口 真理(部会長) 飯田郷介 石田真人
神谷 ふじ子 竹生田 正 徳重千里
中村 弘子 山崎 輝子

事務局 美和野印刷株式会社
印刷協力